

第49回 国際応用動物行動学会 (ISAE2015 Sapporo) の開催

森田 茂 (もりた しげる) ● 酪農学園大学

国際応用動物行動学会 (International Society for Applied Ethology: ISAE) の起源は、1966年に「集約的畜産における行動的問題」に対処するために欧州を中心設立された獣医行動学会 (Society for Veterinary Ethology: SVE) である。1994年に家畜から伴侶動物、展示動物、農業被害などに関連する野生動物を含んだ「ヒトと関わるあらゆる動物」への研究対象の拡大、研究者の国際的拡大に伴い、現在の名称に変更した。

本学会で扱う主なテーマは、家畜、展示動物および実験動物の飼育環境の評価と改善 (アニマルウェルフェア、環境生理、施設工学、環境保全)、伴侶動物とヒトとの関係の評価と改善 (環境認知、問題行動の予防と行動治療)、野生動物管理 (行動および個体数の管理) である。所属会員 (約600名) は、ヒトによる動物利用および共生に関係した動物行動学に基づく基礎的・実用的研究成果を、毎年開催される国際会議 (ほぼ1年おきに欧州とそれ以外の地域で) で公表し、国際的な情報共有を図っている。

アニマルウェルフェアの認知度の向上とOIE (世界動物保健機構) による国際標準化や各国・地域での法規制等の具現化は、この学会から発信された研究成果情報に因るとこ

ろが大きい。我が国においても、家畜のみならず、伴侶動物や実験動物を含む、ヒトと関わる動物のいわゆる動物愛護管理法等の法規制整備や改正にも、当学会とその関連学会から発信された科学的データが参照されている。

また、国内的には、中山間地域における野生動物との軋轢が顕在化しており、過疎化・高齢化と相まって、地域社会を将来にわたり持続的に維持していくことが困難に直面している。野生動物の管理技術開発は、本学会の主要な研究テーマのひとつである。

今回の学会大会は「持続可能な社会のための行動学」(Ethology for sustainable society) をメインテーマに、今後の国際的および国内的な地域社会の持続的発展のために、諸外国からの研究者の参加を得て、ヒトと関わるあらゆる動物の行動と管理に関する英知を結集することを目的として開催した。

日本における今回の開催は、2005年の麻布大学 (神奈川県相模原市) 以来10年ぶり2回目となる。参加者は231人 (24か国) であり、Wood-Gush 記念講演1題、基調講演5題、口頭56題、ポスター112題の発表課題を得た。本会議の組織委員会は、応用動物行動学会 (安江健会長) 会員を中心に組織され、2002 (平成14) 年の応用動物行動学会

発足以来、定期研究発表会およびシンポジウム・ワークショップなどのイベントを合同で開催し、緊密に連携している日本家畜管理学会との共催で運営した。また、関連団体である日本畜産学会、日本動物行動学会、日本動物心理学会、ヒトと動物の関係学会、および霊長類学・ワイルドライブサイエンス・リーディング大学院、北海道畜産草地学会からも後援を得た。(写真1)(写真2)

1994年以来、元エジンバラ大学教授で応用動物行動学発展に功績の高い、故ウッドガッシュ教授を記念して記念講演とし、各会議におけるメインテーマに関する話題提供は、毎年そのテーマにふさわしい研究者に任ぜられている。今年のWood-Gush記念講演は「日本における牛の正常行動に関する研究」(A study of normal behaviour of cattle in Japan)と題して、わが国の家畜行動学・福祉学研究を牽引してきた佐藤衆介氏が、家畜行動に関する小集会の発足や、応用動物行動学会の設立などの話もまじえながら、牛の行動に関するこれまでの研究とこれからの方向について講演した。(写真3)

今回の学会では、サブテーマとして、

1) Animal welfare assessment for good farm practice and production 優れた家畜管理と生産のためのアニマルウェルフェア評価

2) Freedom to express normal behaviour in captive animals 飼育下動物における正常な行動発現の自由

3) Behavioural approaches to wild animal management 野生動物管理のための行動学的アプローチ



写真1 基調講演や口頭発表では参加者より積極的な意見交換がなされた。



写真2 ISAEはポスター発表者にも、基調講演会場にて1題45秒のアピール時間が設けられており、これをもとに各自目当ての発表を選んだ。ポスター会場では各所で熱心な議論が行われた。



写真3 本年のWood-Gush記念講演の演者は、佐藤衆介氏が勤めた。

4) Human-animal interactions and animal cognition ヒトと動物の関係および動物の認知

を設定した。いずれのサブテーマも基調講演を設定し、基調講演1(1日目・午前)では英国・World Animal Protectionのマイケル・アプルビー博士が「応用行動学よ永遠に：動物の管理と福祉は持続性に不可欠」と題して、国際応用動物行動学会がこれまでも行動学的发展を通じて、生態学的・経済的・社会的な持続に寄与してきたことを例を挙げて紹介し、今後その重要性はますます高まるであろうという認識を示した。(写真4)

米国・カリフォルニア大学デービス校のカサンドラ・タッカー博士を招いた基調講演2(1日目・午後)では、「アニマルウェルフェア評価：米国の視点」と題して、米国におけるアニマルウェルフェアの現状とその評価方法について、畜産業にかかわるステークホルダーの階層(生産者、流通業界、試験・研究者)ごとの認識の違いを含め、具体的な取り組み事例に基づいて詳細に解説がなされた。

基調講演3(2日目・午前)は、国立科学博物館の久世濃子博士による「成長過程での環境が繁殖行動に及ぼす影響～オランウータンの事例から～」と題して行われた。久世氏の実施したインドネシアでのオランウータン研究が紹介され、動物園や現地収容施設での妊娠時の行動や母子行動において認められた課題についての興味深い解説があった。野生動物の繁殖向上に、野生下においても飼育環境下においても行動的検討は重要であることが示された。

基調講演4(3日目・午前)では、「飼育下



写真4 マイケル・アプルビー博士による「動物の管理と福祉は持続性に不可欠」と題した基調講演。動物福祉(アニマルウェルフェア)は多くの発表に共通のキーワードであった。

チンパンジーの社会生活-行動の自由の2つの側面-」と題して、飼育下チンパンジーの飼育環境エンリッチメントを長年研究してきた京都大学熊本サクチュアリの森村准教授が、熊本サクチュアリでのチンパンジーの群飼育の試みや新たに設置した飼育施設間をつなぐ通路に関する研究、チンパンジーの生息地の話題について講演を行った。

最後の基調講演(3日目・午後)は「世界は1つ、福祉も1つ～伴侶動物を取り巻く難題」と題し、英国エジンバラ大学国際動物福祉教育センター教授のナタリー・ワラン氏が、伴侶動物の福祉に関わる実践や啓発における問題点として、高度獣医療を受ける動物の福祉を見過ごす危険性、公衆衛生上の重要課題でもある犬の咬傷事故、ペットの飼育放棄や殺処分実施の是非、野良犬野良猫の管理等を取り上げ、伴侶動物でも科学的根拠を示すための調査研究を推進することの重要性を指摘した。いずれの基調講演も興味深いものであり、講演後の議論も活発に行われた。

記念講演や基調講演、口頭発表あるいは

ポスター発表の時間以外で、学会参加者が自ら検討会（ワークショップ）を主催できるのも学会の特徴である。今回の学会では、1日目の18:00～20:30がその時間に設定され、事前に4つのワークショップが企画されていた。ワークショップの詳細は学会直前に知らされるものの、いずれのワークショップも参加者が多く、活発な議論が行われていた。各ワークショップの表題と当日の参加者は、「家畜のサインを読み取り飼育環境改善に生かす機材開発」20名、「肉鶏輸送時のアニマルウェルフェア評価」15名、「アニマルウェルフェアの国際的・地域的な実情」40名、「動物園での展示動物の行動管理」25名であった。（写真5）

さらに、新たな試みとして基調講演の講演者を昼食時に2名ずつ招待し、若手研究者（学生およびポスドク）とアニマルウェルフェアや動物の行動について討論する機会を、3日間にわたり設定した。連日15名枠いっぱいの申し込みがあり、熱心な討論や活発な意見交換が行われた。実際に実験データを取っている若手研究者から、現場目線での討論があったことは有意義であった。また、著名な研究者や同世代の若手研究者とのネットワークが作成できたことは、研究や学会の将来の発展に寄与するものであると考えられる。

今回の学会は、ISAE国内会員に限らず国内関係学会員から多くの参加者を得た。今回の学会での研究発表は、アニマルウェルフェアに関する発表が比較的多かった。応用動物行動学会では「Animal welfare: A



写真5 ワークショップ会場での議論は夜遅くまで続いた。写真は、「アニマルウェルフェアの国際的・地域的な実情」と題したワークショップ。

scientific assessment of animal stress and comfort」と題し、アニマルウェルフェア評価の方法を紹介し、今後の課題（動物の情動、主観の評価）を検討するセッションを2016年開催予定の国際心理学会（ICP2016）で企画する予定である。内容としては、オペラント条件付けを利用した動物の要求度測定やストレスレベルの生理的評価および飼育環境エンリッチメントが計画されている。

今回は、酪農学園大学で開催された日本畜産学会第120回大会に引き続く学会開催であり、海外のみならず、国内の多くの家畜に関する研究者の参加を得ることができ有意義な議論が行えた。また、家畜以外の動物に関する研究者の参加も得て、成功裏に開催することができた。学会の開催は研究交流の第一歩であり、交流を深めた研究者間での共同研究がより活発化することが期待される。